仙台育英学園
同窓会々報

第 30 号
発行所　仙台育英学園同窓会
〒983 仙台市宮城野2-4-1
TEL256－4141
編　集　仙台育英学園事務局
発行人　渡辺　伊太郎
印刷所　㈱トーヨープリントセールス
TEL225－8771

創立百周年を目指して

――新たなる出発――

仙台育英学園
図書館長　遣水満雄

わが仙台育英学園は、昨年意義ある創立八十周年を迎え、数々の記念すべき行事や事業を実施し、創立者加藤利吉先生の樹立された「至誠」「質実剛健」「自治進取」の建学の精神を改めて見直すと共に、八十一年の生涯をかけて果たされた偉大なご事業の跡を偲びつつ、建学の精神を基に、学園の一層の充実と発展とを目指して努力する事を誓い合った。

本年は、創立八十一周年百周年を目指す新たな第一歩の年である。学園にとっては、まさに画期的ともいえる外国語女子コース発足の年でもある。

これらの観点から、学園の本年度の教育方針として次の五項目が設定された。

それは

㈠ 各コースに即した教育課程の編成と指導計画の作成

㈡ 基礎学力の充実

㈢ 基本的な生活能力の涵養

㈣ 国際理解教育の推進

㈤ 生徒会・クラブ活動の一層の充実

であるが、この方針の下、学園理事長加藤　昭先生を中心に全職員一丸となって、努力している所である。

生徒もまた、始めての女子生徒の入学という事ばかりでなく一種の緊張と清新の気に包まれている。

その例として、図書館利用という窓口から覗いてみると、今年度の生徒の図書館利用度は例年より遥かに多い。始業前や放課後、図書館で勉強に励む生徒が多くなったり、貸出冊数も多くなっている。しかも一年生が断然多い。心強い限りである。これは、本年入学した生徒の質もさる事ながら、学園全体に漲る精気がこのような現象を生んでいるものと思われる。

この発展の精気は一体どこから生れて来たのであろうか、私は図書館の一隅で考える。

わが育英学園に、日々学ぶ子弟三千、

世界三聖人の一人として仰がれている中国の孔子の門に学んだ者三人。孔子はその言行によって、測り知れぬ影響を後世に残した。

その孔子が最も愛した門人顔淵は、ほとほと師の偉大さに打たれて、次のように嘆じている。

「之ヲ仰ゲバ彌々高ク、之ヲ鑽レバ彌々堅シ。之ヲ瞻レバ前ニ在リ、忽チ焉トシテ後ニ在リ。循循然トシテ善ク人ヲ誘フ。」

（論語「子罕編」）

私は、論語のこの一節に接すると、私の心には、わが育英学園の創始者加藤利吉先生のお姿が浮んで来るのである。私は残念ながら御生前の利吉先生のご声咳に接する事は出来なかったけれども、いろいろと利吉先生の事を伺っている中に孔子が循々として、門下の子弟を教え導いていた姿、七十三才の生涯を閉じるまで、幾多の苦難にも屈せず、仁を説き、道を広めるために、諸国を遍歴し、東奔西走した孔子の姿と、八十一才のご生涯を終えるまで、「至誠」を説き、幾多の困難に屈せず、学園の発展のために、ご尽力なされた利吉先生の御姿が、私の心の中で、重なってしまうのである。

孔子は、中国の魯の僻陬の地に生れ、十五にして学に志し、三十才前後に、当時の中国の文化の中心であった周の国都で数年間、礼学の修業に専心し、やがて魯に戻って、塾を開き、天下の英才を集めて教育されるのであるが、中国と日本古代と近代との違いこそあれ、利吉先生の育英塾を開かれるまでの経過は、正に符節を同じくするのである。

私は、若い利吉先生の胸の中には、孔子の姿がいつもあったのではないかと想像するのである。

私が孔子の言行の中で最も心を打たれる場面の一つは、孔子が諸国遍歴の途中衛の国の匡という地において、暴徒に襲撃されて、生命の危険にさらされた時の事である。

その時の孔子の言葉を、論語の子罕編では、次のように伝えている。

「子、匡ニ畏ス。曰ク、『文王既ニ没スルモ文茲ニ在ラズヤ。天ノ将ニ斯ノ文ヲ喪ボサントスルヤ、後死ノ者斯ノ文ニ与ルヲ得ズ。天ノ未ダ斯ノ文ヲ喪ボサザル、匡人ソレ予ヲ如何セン。』ト。」

大意は、（聖王といわれた周の文王は、既に亡くなられたが、文王が残されたすばらしい文化の伝統は、ちゃんとこの私に伝わっているではないか。もし天帝が、周の文化など滅亡してもかまわぬと思召されたとするならば、私が周の文化に参与できる筈がないのだ。天帝がまだこの周の文化を存続させたいとお考えになって居られる現在、周の文化の継承者である私に対して、匡の人々は一体何が出来るというのだ？）という事になろうか。

生命の危険にさらされながら、何という毅然とした孔子の態度であろう。文化の継承者としての自負、また文化の伝達者としての使命感の下に、一歩もたじろがずに暴徒に対した孔子の姿がほうふつとして目に浮ぶ一節である。

加藤利吉先生が、空襲によって無惨に焼け落ちた校舎の傍に立たれた時のお気持ちは、正に孔子のこの想いではなかったかと私は想像する。

利吉先生の烈々たる教育者としての自負と使命感がなかったら、利吉先生の、「もう一度やってみよう。やろう。」というお言葉は出なかったのはないか。そして、今日の育英学園はなかったのではないかと想像する。そして、その自負と使命感こそが、わが育英学園に漲る精気の根源であると思うのである。

孔子は、中国の戦国の争乱時代にあって、仁、礼、信を説かれたが、利吉先生は、日本の近代化、国運進展の時をよく洞察され「至誠」をまず第一に掲げられながら、次に「質実剛健」「自治進取」を掲げられたのであろうと想像する。

孔子の教えは、曾子や孟子等の後継者によって継承、発展され、永遠不滅の光を放っているが、利吉先生の建学の精神と不屈の魂は、現学園理事長加藤　昭先生、常務理事の加藤健志先生に受け継がれて、学園の確固たる充実発展の歩みとなっているのである。

しかし、本学園を取り巻く環境には非常に厳しいものがある。近年、仙台市及びその周辺に次々と公立の高等学校が誕生している。明年四月には、本校の目と鼻の先ともいうべき東部地区に仙台東高校が新設されようとしている。しかもこれ等の新設校は、本学園が先鞭をつけた総合コース制をとったり、それぞれ特色あるコース制を設置して、生徒を募ろうとしており、仙台市内の他の私立高校においても、定員を増加して一人でも多くの優れた生徒を吸収しようとしているのである。〝黙っていても生徒が集る〟という時代は、もう遥か以前に過ぎ去っているのである。これからの道は正に険路である。

われわれは、今こそ新しい国際社会に活躍する人材育成を目指し、使命感に燃え、いかなる困難にも屈せず、謙虚にしてしかも大膽に、一致団結、わが育英学園の発展のために努力すべき時を迎えていると思うのである。

創立八十周年

「日米姉妹都市交流　高校生使節団」の随行員として

――感じたままに――

留学生指導課長　近江昭良

シアトル経由ロスの空港に着陸したのは、七月十七日十七時三十分頃であった。機内アナウンスに誘われ、生徒の一人が、本当にアメリカに来たのかなあ、まだ、実感がないんだ、といいながら、なんとなく冷めた気持で機外に出ていった。空港には、小脇に黒のアタッシュ・ケースを抱え、大柄で、鼻梁の高い、厳格な顔立ちをしたコーディネータが出迎えに来ていた。私達を使節団一行であると見て取るや、両手を広げ、オーバーなジェスチャーで、ウエルカムを連発しながら、生徒一人一人と握手を交し、歓迎してくれた。その日差しは、柔和で、やさしさに満ち、仕種も親切であった。生徒のアメリカに対する第一印象が、感銘深く、心に残るものであって欲しいと願っていた私は、生徒の表情を見て、何んとなくほっとした気持になった。

翌十八日より、型通りの語学研修に入り、リバサイド市長・ブラウン氏表敬訪問をピークに、ロス市内観光、デズニーランドへのエクスカーションなど、アメリカでの実生活体験を、時の経過を惜しみながら、充実したものにしようと、貪欲に行動した。生徒の表情は生き生きとし、生徒の感動が脈を打つように伝わって来た。私は、本当にうれしいと思った。

生徒が私を介し、アメリカ人に問いかける質問は、比較文化論的視座にもとづいていた。日本人の文化的視点からアメリカ人のものの見方、考え方について、即ち、アメリカ人の世界観やその評価について、未分化ではあるが、客観的・合理的・科学的な判断を求めて来た。教会での出来ごとは、その一例である。教会に出席する「信徒」は、自己の良心に対して、あるいは神に対して、忠実であろうとし、いわば、心情的な倫理に従って考え、決断や行為を行なおうとしている。それは、病めるアメリカ社会の精神的回帰ではないか。物質文明の中で、見え隠れする良心を、幸うじて、再確認する集団的セラピーではないか、教会は、荒廃し、彷徨する人間の精神作用をフィードバックさせる一機関ではないかなど、スピリチャル・サバイバルに対する質問であった。また、家族、学校、地域社会、国家など集団のなかで、個人の責任をどのように果そうとしているのかという質問もあった。私は、生徒の質問を、相手に忠実に伝えることができず、また、その返答も難解であったので、不充分な議論に終り、語学不足を悔んだが、それでもなお、稔り多い一日であったと思った。その後、アメリカの女性教師と一部の生徒について、アメリカ人の世界観について、理屈ぽい議論をし、また、離婚・殺人・同性愛・社会不安など、不謹慎、不遜とも思われる質問にも、アメリカ人教師は丁寧に、生徒が理解するまで答えようとしていた。終りに、私は、生徒の露骨な質問について、謝らなければならないといったところその教師は、逆に、あなたの学校の生徒は、問題意識があり、すばらしいといってくれた。そして、互に、理解し合うには、話し合うことが最も大切であると満足気に付け足した。後日、教師御夫妻に招待され、民泊している三人の生徒とともに久し振りにお米のある夕食にありついた。その時、日米両国文化の話しになり、UCリバサイド校の民族学の教授をしている御主人から、経験的に取得した知識は、実体が「フィクション」である一切の非経験的な想像上の知識とは区別しなければならないといわれた。実証研究を重んずる民族学者らしい意見に、プラグマティズムの投影を感じながら拝聴した。しかし、私は日本の文化は、二〇〇〇年の歴史の中で形成され、長い伝統があると同時に、個人の考え方及びその役割は歴史的過程の規則性によって、育くまれ、制限され、かつそれに密接に結びついていると説明した。御主人は、自分の学問的興味範疇から、スライドを使い、私達の視覚に訴えつつ、アメリカの家庭生活、文化、アメリカが多民族国家として如何に苦労しているかなどについて話してくれた。目の色、皮膚の色を超越した御主人の話しには、アメリカ人の良心が横溢し、私達は、互に信頼することの大切さを確認し合った。

多くのアメリカ人に出会い、ほのぼのとした喜び、友情を感じたのもつかの間、研修も終り、別れの日となった。出会う喜びが大きければ、別れの悲しみは深く、今年もまた二本の糸が織りなす人生の綾に、墨絵でも見ているかのような、茫漠とした遠景の中に、思い出が埋没して行くのを感じつつ別れなければならなかった。

ブラウン市長をかこんで

本学園での歓迎式

リバサイドより
教育交流使節団来校

私達使節団の返礼として本学園の創立八十周年を祝い、国際青年年高校生教育交流使節団＝ダービー・ネル団長以下十一名の女子高校生が来校したのは、十一月十八日であった。

翌十九日、本学園の歓迎式で、校長先生より、遠来の友に対する労いの言葉とともに、次代を担う青年女子として、広い視野から国際的局面を判断し、平和な二十一世紀の世界を築いてもらいたいというご挨拶がありました。

約一ケ月間、仙台育英学園大志義塾寮に投宿しながら、本学園に通い、茶華道を中心とした日本の伝統文化について学ぶとともに、本学園生、仙台市民と交歓・交流を深め、相互理解・親善に尽力しました。

週末のホームステイでは、父親、母親、子供達の役割分担について質問があり、家庭内では、母親の力が強く、教育熱心で躾が厳しいと感想をもらしていました。

知事、市長、一力河北新報社社主、商工会議所会頭を公式訪問したとき、知事の仕事、市長としての市民行政、新聞報道の社会的使命、仙台の主たる商工業などについて質問をしていました。

このように、使節団は、仙台育英学園高等学校創立八十周年の記念事業に花を添え、民間大使として、大きな役割を果し、帰国いたしました。これも、同窓生諸兄が築いた本学園の国際理解教育の大きな成果であると思います。

学園だより

同窓生の皆様には、ますますご清栄のことと心からお喜び申しあげます。今年もよろしくお願い申しあげます。

次に、学園のことを二・三お知らせします。

× × ×

昭和五十九年四月、宮城県下初の「普通課程総合コース制」を採用してから、今年で三年目になります。

三年めにして、各コース（国大進学コース・私大進学コース・簿記進学コース・外国語コース・体育コース・特別進学課程）をも完全実施になりました。二十一世紀を目指す本学園経営の基盤ができあがったわけであります。

現在、教職員・生徒もろとも、大きな目標に向って努力しています。

× × ×

本学園には「イクエイ・インターナショナルセンター（I・I・C）」という機関があります。

本学園が他に先駆けて、長い間「国際理解政育」を推進してまいりましたが、年を追うごとにその内容が充実してまいりました。その成果を踏まえて組織化した機関が、I・I・Cであります。

I・I・Cは、留学指導課と国際交流課の二つの課を持っています。他の高校にはない機関であります。

個人・団体の海外研修・留学（長期・短期）をはじめとして、外国からの留学生、帰国の受入れ等巾広い活動をしています。

つい最近帰国した者二名。米国からの留学生一名は、七月上旬帰国、秋には留学生が来る予定です。

× × ×

今年の高校総体も、例年に劣らずよい成績を挙げました。

団体優勝―サッカー・ボクシング・器械体操・国体三位―レスリング・硬式庭球。

個人種目についても、各部とも多くの入賞者を出しました。

八月一日から開催される。山口県を主会場とする「昭和六十一年度全国高等学校総合体育大会」に参加する部は次の通りです。

団体種目としては、サッカー・ボクシング・器械体操。

個人種目としては、レスリング・柔道。

成果を期待しているところであります。

× × ×

この同窓会報がお手許に届くころ、暦の上では、初秋の候でしょう。立秋・七夕・お盆と、何かにつけ「みちのく東北」の燃え立つ季節でありますが、残暑もきびしいことでありましょう。同窓各位のご健勝を祈念申しあげます。

（R・S）

進学指導部（外国語コース女子）

「女子一期生入学」

生徒指導課長　佐藤脩

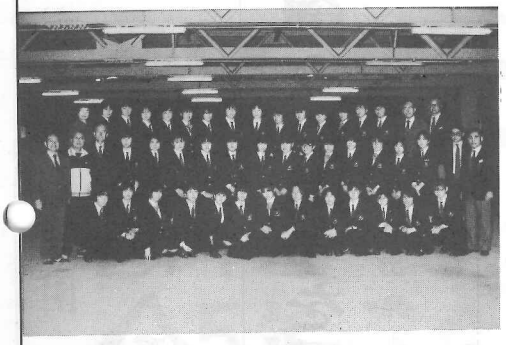
本学園では、昭和六十一年四月より外国語コース女子四十名を受け入れました。本学園の国際交流の推進をさらに充実させるために加藤校長・加藤常務理事を中心に討議を重ね、二十一世紀に向けて高邁な教育理念の実践へと、門戸を女子に開放しました。仙台市内の私立高校では、男女共学は本校が初めてであります。

カリキュラム編成は特に英語に重点を置き、他の高私立校では見られない外人教師による生きた英会話を週二時間指導しています。二年では英語Ⅱ、外国事情等、三年では総合英語、英語ⅡC、英語ⅡB、演習等を含めて徹底的に指導します。外国に留学しても充分に異国文化を吸収でき、国際舞台でも活躍できる女性の育成を目指しています。また英検二級取得の女子生徒も多数おり、卒業まで二級を全員取得させ、一級へと挑戦させるカリキュラムも組んでます。

大学進学にも対応できるよう一年では国語Ⅰ、数学Ⅰ、英語Ⅰの三教科については特進（男子）組と一部合同授業で実力を互いに競わせています。二年では理系コース、文系コースに分け合同授業を取り入れます。三年では各コースの特徴を生かし、演習を取り入れた実践的進学指導をし、積み上げ方式による指導で入試に対応できる実力を養成します。

必修クラブ活動では、日本の古き良き伝統文化を、茶道や華道に求め、裏千家や小原流の一流の師範が各月月二回指導、教授します。

女子の新しい制服は、中学生・高校生の間では評判が高く関心の高さは大変なものであります。制服は、胸にエンブレムのついたモスグリーンのブレザーとタータンチェックのスカート。それにそろいのリボン（正装時）かネクタイ。カラフルでファッショナブルになっているので本学園の発展を象徴しているものであります。



会員寄稿

幼少の頃

旧十三回卒　西牧一男

私が小学校に入学して手にした教科書は、かなり自由主義的、平和主義的な色彩が濃かった。

ハナ、ハト、マメ、マス、ミノ、カサ、カラカサとヤンチャ坊主の想い出が深い。次期改訂の昭和八年まで続いた。

一方、風俗史家は、この時代をエログロ、ナンセンスの時代などと呼び、きわめて享楽的な世相のように描くこともある。たしかに大人たちの脇の下から垣間見た世界の一部には、子供心に頽廃の匂いをかぎつけるようなものがあった。だが日常的な庶民の生活は、それなりに健全なつゝましいもので、今の世相から見れば、むしろ貧しいものだった。

戦中戦後の目茶苦茶な時代に育った子供時代を過ごした、いま四十代初めの連中に私どもの子供時代の話をすると、「良き時代だ」といって羨ましがる。私自身「悪い」時代だったとは思わないが、とりたてて良かったとも思わない。あの当時、そんなことは別に考えることもなく、普通に過ごしてきた子供時代が、良きにつけ悪しきにつけ、ただ無性に懐しいだけなのだ。」

その頃の想い出の一つに、たしか小学校二年生のころだったでしょうか、自分で創作した絵ものがたりを鉛筆をなめなめ豆本を作り木綿糸で中とじして同じものを十冊位書いて友だちに分けてやったことがありました。今にして思えば印刷の仕様が知らない小供としてどうしたら複数のものが出来るかまでは探究の智恵が生じなかったのです。中学三年頃から俳句（俳句になっていたかどうか）にコッて一日百句作ることを念願に授業もうわの空で作句（？）に没頭したものです。同好の志三人ばかりよって俳句誌「金鶏」を出すことにきまったが、何しろ貧・ん無しの学生のこと、それでは自分たちで製版し製本しようと学校の近くの謄写版屋（現在の㈱文献社鹿野馨社長宮城県支部顧問・日軽印参与）のオヤジさんに相談したところ、鑪版と印刷機を借すからやってごらんと親切に言われ、文具店に走り鉄筆と謄写原紙と用紙を買いもとめシロウト三人で分担してなんとか一冊にまとめた。私は表紙を引受けて金鶏の姿に金粉などをふりかけて一寸した創刊号を刷り上げたものでした。これが印刷に接した初めと思います。やはり三号雑報に終ってしまったことが残念でした。このキッかけが潜在的に私の一生を左右することになろうとは…。

又、戦前勤務先の軍需工場東北特殊鋼会社で用度係として印刷と文具の購入に当り一層印刷に興味を持ち、物資枯渇の時でしたので用紙を調達して印刷会社に廻したり、印刷工場に出入して活版の仕組みを覚えたりしました。昭和十九年七月十日仙台空襲により九一一名死亡。私も不傷しかろうじで一命をとりとめたが後一年間療養に要した。戦後独立を志して今まで見覚えの印刷業をやろうか文具関係をやろうかまよいました。文具は貧乏具と言って品数ばかり有って仲々もうからないョと言われて、それでは印刷業と思い資金の少なくて出来るガリ版印刷をやることになりました。この動機も会社にシオン謄写堂の松浦邦雄氏が徴用の為入社され厚生課でニュースなどのガリ版を毎月発行しておられ、謄写版でもこんなにキレイなのが出来るのかとびっくりして、いろいろお話しなどを聞いていたので独立についてご相談申し上げ援助を乞いました。

昭和二十一年七月、セイトウ社として産声を上げました。それ以来三十八年あまり発展することもなく、なんとなく馬令を重ねてこの年になりました。現在息子二人が社業を継ぎ、孫六人に囲まれての生活でございます。家内も大正十年生れですので何かとこの会にはご縁があったものと存じます。

趣味と申しては、旅行、読書、マジック、プラモデル、写真等々でして、旅行はお陰様で日軽印の全国大会で北は北海道から南は九州まで全国を旅行出来、又、昨年は家内とハワイと香港に参りました。ドルッパ展見学もいたしましたし東南アジア、韓国、台湾、シンガポールと歩きました。まだまだ希望の所はありますがもう限度かもしれませんネ、歩けるうちは是非地球を歩きたいと思いますが。マジックはまだかけ出しですので勉強中です。機会があればご披露いたします。プラモデルは孫をだしにして材料を仕入れるので小遣いは大変です。読書は好きな方なのですが最近長編ものはだめですネ。最近南方熊楠とか内田百聞、川柳未摘花、柳宗悦、鈴木大拙、稲垣足穂、民俗関係、性関係書等の古本が七百冊ばかり友人より譲り受けましたので楽しみです。

大正十年生れの同志は昭和二十五年次降年々着実に減って昭和五十三年で一、〇〇八、〇〇〇ですから現在は確実に百万を割っていることでしょう。

長々と私の印刷に対するかかわりを書きました。これから大正十年生れの軽印刷の同志の皆さんと手を握って貴重な余生を楽しく過したいと思います。どうぞ全国の皆さんよろしくお願いいたします。さようなら——。

東北須磨の濱邊に歌ふ
西牧　一男　作
（中学三年生）

満天雲なく月は澄み
海原渡るそよ風寒し
五人の短影砂濱遠く
吟聲寥々と
須磨の濱辺に

水平線上波浪のまにまに
見えつ隠れつ
漁火のちらちら

棲上左手に牡鹿の黒影
神韻測たり
須磨の濱辺に

打ち寄する怒濤は
厳に吠えて
玉なす飛沫に両頬濡し

かたへの友も
しばしは聲なく
昏鐘静かに聞く
須磨の濱辺に

西牧一男氏は昭和六十年十二月二十九日ご逝去され、この原稿は61年一月十五日の告別式で長男より渡辺伊太郎事務長へ手渡されたものです。

創立八十年おめでとうございます

高普十四回卒　佐々木　統

仙台育英学園八十周年、本当にお目出度う御座居ます。少生が入学した岩手医科大学は創立五十周年を、過ぎましたが、それでも大変なことだと思いました。八十年となると気の遠くなる様な気が致します。

歴史を築かれた、加藤利吉先生並びに先輩方々の御苦労は並大低のものではなかったと想像致します。

さて、少生が育英学園高校に入学しましたのは、昭和三十四年四月でした。公立高校の受験に失敗し、本校に入学しましたが、何となく自分が落ちこぼれた様な気がして最初は勉強が手につかなかった様な状態でした。一学期が過ぎた頃から自分をじっくり見つめ直し、このままでは他の公立高校に進学した友達から益々遠ざかって行く自分が情けなく思い、では如何にしたら、長い人生を勝ち進むことが出来るかを色々と戦略と言えばおおげさになりますが、対策を練りました。その時の担任は、今は亡き塚田先生でした。

塚田先生は非常に少生にとっては良き師でありました。先生は僕に悔しかったら二度と敗け戦はやめろ、勝つ事だけを考え勉強しろ、と檄を飛ばして下さいました。僕は学校に通いながら英語塾や文理の予備校通いをしながら学校を卒業し、最初、日本大学農獣医学部に入学しました。

この大学は四年間ですが、運動に夢中になったせいか五年間かかって卒業し、卒業した時に岩手医大歯学部で編入試験の募集が目にとまり、よし、もう一度チャレンジしてみようと思い、一生懸命半年間勉強した記憶があります。

その時程自分の能力と運動で鍛えた体力の全てをぶつけた事は後にも先にもない様な気がします。一日、恐らく三時間ぐらいの睡眠しかとらなかったと思います。その甲斐あって首尾よく岩手医大の編入にパスする事が出来ました。その時の感激は今でも忘れる事が出来ない感激の一つです。

日大の時は個人競技をしてましたが、岩手医大に入ってからは、団体競技のボート部に入部しました。個人競技と団体競技の根本的違いを自分の目で確かめたかったからです。

大学四年の時主将になり、東医体や東北大会等に参加して種々の人達や仲間に出会う事が出来、又、人生の生き方を教わった様に思います。岩手医大を卒業して医局に三年入局し、その間医局長や、秋田労災病院の嘱託等を経験し四十九年四月に現在地に歯科医院を開業致しました。

今迄述べたのは私の大体の高校からの概略です。最後になりましたが、学生諸君に声を大にして言いたい事を申し述べます。

要するに人生は一度や二度の失敗でくじけず、目標をもって努力する事が肝心であって高校では勝敗は決まるものではなく、如何にして、自分がベストを尽くして、目標に向って努力するかが、人生を左右するのだと言う事を肝に銘じて一生懸命頑張って頂きたいと思います。書き足りない事がまだまだありますが、最後にこの文は、教職員並びに現在の学生諸君にも読んで頂ければ幸いです。

佐々木歯科クリニック
歯科クリニック東仙台
歯科クリニック七郷
各院長

ギリシャを訪ねて

東光学園理事長
旧中一回卒　木川田　正　毅

イソップ物語やギリシヤ神話などで育てられた小生の心の奥底には、エーゲ海の文化に接したい憧憬が幼少時代より常に潜在していた。西洋の心理学者は〝FEELIGS ARE FACTS〟〝感情が事実となる〟とよく謂っているが、少年時代の夢が現実となったのは一九五五年の夏で、壮年時代に米国留学を完了し、帰国の途中の時だった。コロンビア大学の先輩で同窓生であるアテネ市に在るギリシヤ国立社会事業大学校の学長が近代的で模範的な心障害児者の福祉施設と老人ホーム運営管理の実践についての報告をカナダ、トロント国際社会事業大会で発表されたが、その際学長と直接連絡をとり最初の訪問となった。その後二十余年を経過し、家内と娘夫婦を同伴しアテネ市内のホテルを根拠地として選び、一週間に亘り、著名な諸々を訪ねることとした。

◇ギリシヤ（ELLAS）

正式な国名はギリシヤ共和国（DEMOKRATIS TES HELLAPOS）で一般には〝ELLADHA〟と呼称されている。ラテン語ではゲラエキカ（GRAECIA）英語ではグリース（GREECH）という。希臘という文字はヘラスの漢訳で、日本ではそれをギリシヤのあて字として使用している。

ギリシヤは、東地中海に張り出した掌をひろげたような形をしたバルカン半島南部とクレタ島並びにエーゲ海に美しい大小の宝石がバラバラと海の中に鏤められたように浮ぶ多島の島々からなっている。全土の面積が一三万一九四四平方キロであるが、日本の約半分の面積で、ヨーロッパの小国にもかかわらず、一万五千キロというヨーロッパ随一の海岸線の長さを誇っている。人口は第二次世界大戦以後都市化の現象が進み、全人口約九七一万（推定）で、そのうち四〇〇万人が首都圏のアテネ、ピレエッス地区に集中している。人口密度七四／㎢。土地がやせていて農業がふるわないため、大都市で職についない労働者は、西ドイツ、アメリカなどに出稼ぎに行く人々が多い。首都アテネから車で一時間も行くと、羊飼いのほかすれ違う人がいないほど過疎地帯が広がっている。人口数千の町や村の中央の広場にギリシヤ正教の小廟があり、燃明のにぶい光が聖母マリヤの像を照らしている所などがある。住民の九六％までがギリシヤ正教徒で、一部にはイスラム教・ユダヤ教・ローマンカトリック教徒がいる。カトリック教徒の本山がイタリーのバチカンにあるが、それに相当するものがトルコ領コンスタンテイタポリスにあることにギリシヤ正教徒たる国民は不満をいだいている。ギリシヤの首都はアテネで、住民は大西洋・地中海型人種として分類される純粋のギリシヤ人が大部分を占めるが西部と北部に少数のマケドニヤ人・トルコ人が居住している。彼らが現在使用している公用語は、古典時代のギリシヤ語を簡略化した近代ギリシヤ語である。

新約聖書を古典時代のギリシヤ語で読んだ経験をもつ小生にとっては韓国語のハングル文字よりは異和感がなかった。アテネや主要観光地では英語・ドイツ語フランス語が通じるので旅行には不便を感じなかった。尚旅行者は通貨の両替について知って置く必要がある。

通貨単位…ドラクマ、一ドラクマ約二、五円

紙幣…五〇、一〇〇、一、〇〇〇ドラクマ

硬貨…一、二、五、一〇、五〇、ドラクマ

両替…銀行か国立観光局で替えられるが、ホテルやレストランでは米弗でも支払いが出来るがあまり率がよくない。

◇アテネ市内観光

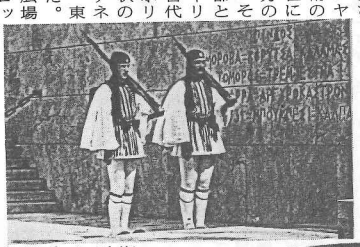
アテネはギリシヤ本土の南東部、サロン湾に臨むアッティカ平野に位置し、二つの川にはさまれ、南北東の三方は山で限られている。南はアテネの外港ピレウスへと開けている。集落は古代より栄え都市は紀元前八世紀に成立し前六世紀には世界最初の民主政治が行われた。前六世紀には最盛期のペリクレス時代を迎えた。その頃に、ソクラテスが活躍し、パルテインが造営された。その後マケドニヤローマの支配下では学術の中心にとどまり、中世にはまったく衰微し、大方の古代遺跡も破壊された。そしてギリシヤ独立後主都となり、今日、名実共にギリシヤの中心となった。古代アテネの市街はアクロポリスを中心としたリング状の都市だったが、現代アテネはアクロポリスの北部・東部へと市街地が拡大した。市の中心はシンタグマ広場で、都市景観は南ヨーロッパによくある現代的な都市化と化した。

◇シンタグマ広場

こゝはアテネの心臓部に当る広場で周囲には官公庁の威厳ある重要な建物や一流ホテル、航空会社（オリンピック航空・日本航空）並びに観光案内所、エアーターミナル等の建物の他ショッピングセンターやビジネスセンターの近代的建物が立並んでいる。広場の中央には噴水があり、その回りには月桂樹・糸杉俠竹桃の木立がある。その片隅には新聞・雑誌・絵葉書や土産物を売る店もあり、一般市民の憩いの場だけでなく旅行者の連絡の拠点になっている便利な広場である。

◇国会議事堂

シンタグマ広場の東側、アマリアス大通りに面している淡黄色の美しい建物。一八三六年―一八四二年ドイツのベイエルン宮廷建築家ガルトナーが初代ギリシヤ国王オソンの王宮として設計したもの、正面玄関が西側にあり、ドリス式の大理石の柱が並ぶ擬古典式。この正面にあるシンタグマ広場は、一八四三年最初の憲法が発布された記念すべき場所なので「憲法広場」コンステチューション広場と呼ばれている。ここが一九三一年に改造され、国会議事堂として使用されている。



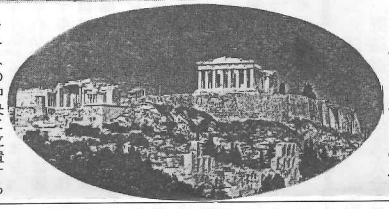
◇無名戦士の碑を護る民俗衣裳の衛兵

この議事堂の正面は小高くなっているが、その手前の壁面に設けられた大きな横長の碑が無名戦士の碑である。一八二一年、約四百年にわたるトルコ支配に対して独立戦争が起った。以来、いくつかの戦争で戦死したり行方不明となった戦士たちに捧げられ、一九二三年につくられたもので、死の床に横たわる古代の歩兵の姿が浮彫りにされている。その両側に、古代ギリシヤの歴史家ツキジデスの言葉が刻まれている。

右側には「名の高き者にとっては地上はみなこれ青山なり」左側には「行方知れぬ戦没者のためには敷き延べられた臥床がひとつ空のまま運ばれていく」とギリシヤ語で記されている。この碑には、儀伏兵士が五名配され、中世紀以来の伝統的な衣装を着けて三〇分毎に左右互いに持ち場を交替する光景がみられる。また一時間毎に交代式が行なわれる。

英国のロンドンで見た儀伏兵の儀式を思い出し感激した。

◇アクロポリスの丘



◇遥かに望むアクロポリスの丘

アテネの中央に位置する海抜約一五〇米の岩山（石灰岩）の丘の上に宗教的中心のパルテノン神殿をはじめとする神殿があり、二五〇〇年の歳月を越えて輝く太陽と青空の下に雄大な姿を晒しているが、その偉大な容姿には深い感動を覚える。

「アクロ」とは「高いところ・丘」の意で、「ポリス」は「都市・都市国家」の意で、古代ギリシヤ・ローマでは一つの国家を形成していたが、それをポリスという。一般にポリス成立の不可欠な立地条件として、①外敵の侵攻を防ぎやすいこと。②食糧自給が可能であること。③水に恵まれていること。

紀元前五世紀頃に丘の斜面の泉の周囲に人々が住むようになり、住民が段々増加、他の民族の侵入を防ぐため、中国では万里長城を築いたが、アテネではこのアクロポリスの城塞を築いた。B.C.六世紀にアテネの守護神を祭るためアテネ古神殿を建立した。B.C.四八〇年にペルシヤ戦争でアクロポリスはペルシヤの手に落ち徹底的に破壊された。

その後アテネはサラミスの海戦、プラタイアの戦いに連勝し、ペルシヤに圧勝した。指導者ペリクレスの下にアテネは黄金時代を迎えた。ペリクレスの提唱でアテネ神殿の再興が決まり、B.C.四四七年種々の分野の人々が工事に従事し、四三八年にパルテノン神殿が落成した。以後次ぎ次ぎに神殿や建物が完成していった。

ローマ帝政時代にはキリスト教が国教になりパルテノンも教会として利用されたが、実に十五世紀、トルコ領になると回教寺院に改修された。

一六八七年、ベネチア軍がアテネに侵入しアクロポリスを包囲した。トルコ軍は丘にたてこもり、当時パルテノン神殿は火薬庫として使われていたので、ベネチア軍の放った砲弾で、二〇〇〇年以上も完全な姿を保ってきた神殿が無残にも破壊された。その後、アクロポリスには人々が住みつき、住居が密集して建てられ、神殿の一部が建築材料に使用され、残った土やゴミの中に埋もれるままになっていた。

一八〇一年、イギリスのトルコ大使エルジン卿が、パルテノン神殿の優秀な彫刻物を選び本国に持ち帰ったが、現在大英博物館に保存されている。

やがて、ギリシヤはトルコより独立し、文化遺産の保存の声が高まり、アクロポリスの大がかりな発掘が行なわれ、当時あった民家や回教寺院のほか、丘の上を覆っていた土もすべて取り除かれ、今も修復作業が続けられている。

◇西北からみたパルテノン神殿

◇パルテノン神殿

アクロポリスの中央にある一番大きな神殿。アテネの守護神アテナを祀ったもの。ドリス式建築の最高峰といわれ、A.D.四三二年に完成した。黄金時代を迎えたアテネは、指導者ペリクレスの提唱でペルシヤに破壊されたアクロポリスの再建を決議し、当時の天才彫刻家フィディアスを総監督として、カリクラテスやイクティノスなど建築家の設計で紀元四四七年にまずパルテノンより着手した。それには国中の石工、金工、彫刻家、建築家並びに画家等もこぞって参加し国家発揚を目指して互いに技術を競いパルテノンの建設に没頭した。

パルテノンは屋根から床に至るまで純白、アテネ郊外のペンテリコン山の大理石を使用し基段は横三十一米、奥行七十米、柱の高さ十米というドリス建築、正面と後ろに八本ずつの円柱を配し、側面には十七本ずつの円柱を並べている。パルテノン神殿は人間の目の錯覚をよく研究して設計されている。その秘密は柱と壁と床の美しい線が額縁のように空間を区切って、その奥に紺碧の空をポッカリとのぞかせ思わず吸いこまれそうな感じを抱かせる。線と面で構成されている神殿はマッチ箱のような直方体というよりは、ピラミット型といったほうがいい。底辺が広く、上に行くに従ってせばまる。どの方向から見ても凡ての柱が内側にいくらか傾斜し、台輪を支え、のしかゝって重量の負担をやわらげている「曲線によって直線の美を表した」建築と謂れている。

パルテノン東側の破風（復原）

パルテノン西側の破風（復原）

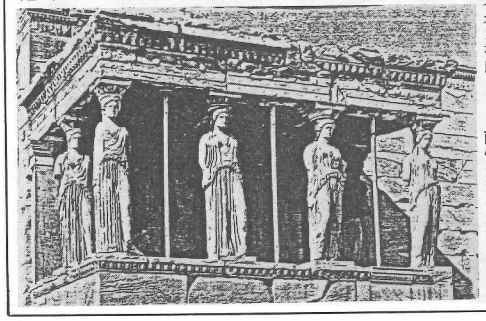
◇アテネ女神の像

神殿の正面と裏の破風は彫刻で飾られている、正面にアテナ女神がゼウス大神の頭から誕生する場面で、裏面はアテナとポセドンがアテネの守護神の座をめぐって神々の前で競っている場面が表されている。神殿内部は前室（玄関）神室、乙女の間、後室に分れていたが、現在はその境は残っていない。よく知られているのが神室にあったという高さ十二米の黄金と象牙で出来たアテナ女神像、彫刻家フィディアスの大作でビサンチン時代、コンスタンチノーブルに持ち去られた。乙女の間は秘宝を保管するところだったが、後にこの場所の名称はパルテノンが神殿全体を指すようになった。

◇エレクテイオン神殿

アクロポリスの北側にある優美なイオニア式の神殿で、北向きの人口と東向きの人口とをもった変則的複合神殿である。最初にアテナ女神を崇拝し、アテナ祭をはじめた伝説の王エレクテウスの名がついている。

A.D.四〇七年に完成した建物はアテナ・ポリアスの神室とポセイトン・エレクトウスの神室には女神の木像が安置されていた。ポセイトン・エレクテウスの神殿には聖蛇が住んでいたという。神殿の西側にはバンドロリスの聖域が接しており聖なるオリーブの木があった。



◇エレクテイオン神殿　南側にある六女人柱

結び

アクロポリスの丘をはじめ各地に点在する遺跡を訪ね、夢のような伝説に接し古代の幻想に誘われると、湧き出る悦びを禁じ得ない。而し紙面に限りがあるので、アテネ市内の記事をここで結び郊外の遺跡やエーゲ海に関しては次の機会に記すことゝす。

以上

祝優勝

"甲子園出場"

5年ぶり8度目

戦跡

◇2回戦

仙台育英	7	6	1	1	2	17			
石巻西	0	0	0	0	0	0			

（5回コールド）

◇3回戦

仙台育英	0	0	0	1	1	1	0	0	3
仙台三	0	1	0	0	0	0	0	0	0

◇4回戦

仙台育英	0	3	0	2	0	2	0	1	8
仙台	0	0	1	0	0	0	0	0	1

（8回コールド）

◇準々決勝

名取北	0	0	0	0	0	2	1	0	3
仙台育英	3	1	1	0	4	0	0	X	9

◇準決勝

東北	0	0	0	0	0	1	0			
仙台育英	0	5	0	1	2	2	X	1	0	

（7回コールド）

◇決勝

仙台工	0	1	2	0	1	1	1	0	0	6
仙台育英	0	0	1	1	0	0	5	1	X	8

【仙台育英】

	学年	氏名	打数	得点	安打	打点	1	2	3	4	5	6	7	8
（左）斉藤	❸	5	0	1	1	1	編…		三…	遊…			捕…	遊…
（遊）日野	❸	5	3	2	0	0	遊…		中…	右…			左…	右…
（中）佐々木	③	2	0	0	0	0	右…		二…					
中 渡辺	③	1	0	0	0	0					左…			
投 広瀬	②	0	0	1	1	0								
打 久道	③	1	0	0	0	0								
中 山岸	①	0	0	0	0	0						右…		
（捕）門馬	③	4	0	3	3	0		遊…	中…			中…	投…	中…
（右）中島	②	4	1	1	0	0		四…	投…			投…	中…	右…
（二）星	②	3	2	1	0	0		右…		二…		中…	四…	捕…
（二）伊藤	②	3	2	3	0	0		右…		右…		四…	右…	一…
（投）橋浦	❸	3	0	1	0	0		四…		右…		左…	捕…	二…
（三）斎藤	❸	3	0	1	0	0		中…		死…			三…	三…
計		34	8	13	5	1	残塁 9						併殺 0	

硬式野球部は、「第六十八回全国高校野球選手権宮城大会」で、努力精進の結果優勝を果し、宮城県代表として、全国制覇を目指して八月八日からの大会へ出場することになりました。

選手一同は、八月四日午前九時五十分の新幹線「あおば」で勇躍出発いたしました。

同窓生一同として、硬式野球部の甲子園での活躍を大いに期待したいと思います。

つきましては、出場経費の一部を同窓会として協力することになりました。

従って、同封の「郵便振替払込金」用紙をご利用して頂き、**一口　参阡円以上**ご協力して頂きたいと思います。

昭和六十一年八月

仙台育英学園高等学校

同窓会会長　小坂信雄

総会だより

自昭和60年8月1日
至昭和62年7月31日

第三十一回　同窓会総会報告

昭和六十年八月三十一日㈯午後五時から昨年と同じ〝パレスへいあん〟を会場として、第31回同窓会を開催いたしました。

本学園から加藤昭理事長・校長、加藤健志常務理事・校長室長をはじめ多数の先生方のご臨席をいただきました。

懇親会では恩師をかこんでの懇談、また、先輩と後輩のかき根をとり払った談笑も盛り上がり、来年の再会を互いに約束して閉会しました。

総会次第

一、開会の辞　事務局長　渡辺伊太郎
二、会長挨拶　会長　小坂信雄
三、校長（名誉会長）挨拶　校長　加藤昭先生
四、議長推戴　議長　小坂信雄氏
五、議案審議
1　昭和59年度事業報告・収支決算報告（審議の上承認）
2　会計監査報告（監事大宮照夫氏）
3　昭和60年度事業案・予算案（審議の上承認）
4　役員改選（推薦委員により選出）
六、閉会の辞　事務局長　渡辺伊太郎

クラブ紹介

期待されるサッカー部

全国大会出場

サッカー部監督　阿部俊夫

九年振りに昭和六十一年度、インターハイ（全国高校総体）に出場できました。体育コースができて三年目、生徒達が順調に育ってくれて本当にうれしい気持ちです。私がこの仙台育英に来たのは昭和五十六年です。今年で六年目を迎えますが、それから五年、試行錯誤の繰り返しで、現在もその通りですが、本校（本学園）のイメージは、東北ではNO1、全国でも上位の力を持っているチームだと思っていました。それが、私が来た途端に勝てなくなったのです。一年目は予選敗退、二年目は決勝戦で東北学院にPKの末に敗れ、三年目も同じく決勝戦で仙台向山に負けました。四年目もまた予選敗退と、とにかく私としてはこのチームに来たからには簡単に優勝できるだろうと思っていただけに、ものすごくショックが大きかったのです。私は本学園出身ではありません。

ですから、なおさらの事「強い育英」というイメージが強烈に脳裏に焼き付いているのです。私は秋田生まれです。高校は経大附属、現在の経済法科大学附属です。高三の時の国体で宮城少年選抜はベスト8まで駒を進めましたが、その中心が育英高の選手だったのです。その時、私は秋田選抜の一員として、育英高選手の活躍をうらやましくスタンドから観戦していたのでした。

大学での四年間が過ぎ、前述した通りの気持ちで楽観的な気持ちでした。でもその反面では「負けられないな」という気持ちもずいぶん強かったようです。でも、その気持ちが一年目にして早くも無残に崩れてしまいました。自分にとって期待はずれの戦績でしたが、一つ、今日の育英サッカー部の土台になっているものができたのです。それは、部員の父兄からなる「父母の会」なるものです。おもに春夏、年二回行なわれます合宿の際の食事の仕度、試合時の応援などです。特に従来の合宿では、部長や監督さん自ら練習の他にそのやり、一人で一石二鳥以上の働きをしなければなりませんでした。父兄の皆様方の応援のおかげで、合宿期間中に練習に集中できるようになったと思います。

もう一つ、早期練習があります。三、四年前などは、宮城野原公園内の県営サッカー場の前で、私も一諸になってトレーニングをしていました。私もその当時は、宮城教員クラブでプレーをしていました。さらにもう一つ忘れてならないのが、体育コースの設置です。これは校長先生はじめ、関係の諸先生の御努力で、また「強い育英」の復活を望まれる皆さんの気持ちが、そうさせたのだと思います。

生徒、父兄―学校―OBこの関係が勝利というゴールへ一直線のつながりを持てば、自ずと道は開けると思います。私チームを励ましてくれている人達に感謝するとともに、妻に〝ありがとう〟を贈ります。

支部だより

一・三会総会の報告

旧十三回卒　鈴木三郎

去る三月十五日に昭和六十一年一・三会総会を仙台駅前東宝ビル「寿限無」に於て開催いたしました。

私共は六十五才の年を迎えました。当時私達卒業生は八十六名でした。ところが詳細に名簿を整理してみますと、なんと何時の間にやら約半数以上も死亡、消息不明という事になっております。然も昨年以来僅か一年の間に三人の同級生が此の世を去って仕舞いました。

我々一・三会の大幹事長であり、育英同窓会総務部長であった西牧一男君（六〇・一二・二九日）及び、野球部の名マネージャーであった富田精君（六一・二・二四日）又、一昨年の十二月末には、野球部名捕手として鳴らした菊田信男君が、次々と他界されたので誠に心淋しく、且つ残念でなりません。遂に過半数の方々が亡くなりました。この分ですと、むしろ、あの世で一・三会総会をやった方がより盛大ではないかとさえ思われる位です。

故人を偲び黙祈を捧げ、何かと思い出にふける淋しい総会ではありましたが、又反面それにつけても、残った我々だけでも益々健康に留意し、毎年元気でこの会に出席しようとお互い誓い合った意義ある総合でもあった訳です。尚この総会に当り同窓会より多分の御祝儀を頂きましたことについて、心から厚く御礼を申し上げます。

以上御報告を終ります。

仙台信用金庫育英会開催

商四回卒　岩渕勇

早春の松島ホテル五大堂に於いて三月七日一泊にて六十一年度の総会兼懇親会を行い総会員四十一名中三十二名の参加をいただき先輩後輩の親交を図り遅く迄楽しい一夜を過しました。

会員の皆様には各店で活躍しておりますが年に一度の育英会を楽しみに致しており来年の懇親会を待ち焦れておる様子です。

総会席上母校が勉学スポーツに活躍され先輩として大変喜ばしいとの言葉が聞かれ今後共母校の活躍を期待致します。

昭和61年度

同窓会総会

8月30日㈯

PM 5:00より

会場　パレス・へいあん

仙台駅前広瀬通り

電話　265−5111

懇親会費　5,000円

（当日持参）